

IV 研究会

ユニット 1（南アジア地域班）

第 1 回 ユニット 1（南アジア地域班）研究会

報告題目	タイ仏教の現在・インド仏教の現在
開催日時	2010 年 7 月 22 日（木）16:00～19:15
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
報告者	コンカーラトナラク・プラポンサック（K. Phrapongsak, タイ国マハー・ニ カーヤ派タンマガーイ寺院総住職補佐, 長老） ジクメー・ツルティム （Jigme Tsultrim, 中央チベット政庁（インド, ダラムサラ）チベット博物 館館長）
参加人数	61 人

【コメンテーター】中村尚司（龍谷大学人間科学宗教総合研究センター研究フェロー）
芳村博実（龍谷大学文学部教授）

【報告のポイント】

アジア仏教の現状確認の一環として、当該地域の仏教事情に詳しい二名の研究者より、それぞれタイ仏教とインド仏教の一部を構成するインド在住チベット人の仏教に焦点をあてた報告がなされた。プラポンサック師は、「タイ仏教の現在」と題して、現在のタイ仏教の教団構成や、出家比丘が世俗社会と一線を画しているというタイ仏教の特色について報告し、変革期にあるタイ仏教の課題について述べた。ジクメー氏は、「インド仏教の現在」と題して、インドに暮らすチベット人の歴史に焦点を当て、伝統文化継承への取り組みとともに現代的な教育が実施されている状況を報告した。

【報告の概要】

プラポンサック師の報告によると、スコータイ王朝時代にタイへ伝来した仏教は、現在マハー・ニカーヤ派とタンマユット・ニカーヤ派から構成されている。タイ仏教の特色は、出家比丘が世俗社会と一線を画している点にある。比丘達は、パーリ語や仏教教義に関する教育を段階的に受け、伝統的な上座仏教を受け継いでいる。プラポンサック師によれば、タイでも出家者が減少しつつあり、近年は毎年 10 万人を目標とする短期出家の催しなどを全国的な規模で行って、まず多くの一般の人々に出家体験をして貰い、その結果として恒久的な出家者の数を増やすことを試みている、ということであった。

次に、タイ南部 3 県では多数派を占めるイスラーム教徒の内の過激なグループによって少数派の仏教徒が殺害されるという事件が相次いでおり、マハー・ニカーヤ派とタンマユット・ニカーヤ派が協力して、托鉢式などで集めた物資をタイ南部に送り、仏教徒を援助

しているという衝撃的な事実が報告された。

最後にプラボンサック師は、世俗との関わりを避けてきたきらいのあるタイ仏教であるが、今は変革期にあり、社会や政治に対して仏教側から問題解決に向けた働きかけをしなければならない、と述べて報告を終えた。

ジクメー・ツルティム氏の報告は、過去 50 年インドに暮らすチベット人の歴史に焦点を当てたものであった。1959 年にダライラマ 14 世がインドへ政治亡命すると、続々とチベット人がインドへ向けて故郷を離れた。その結果インドに住むチベット人のアイデンティティ保存に向けての活動が始まった。現在、インド在住チベット人に伝統的な文化や習慣の伝達と現代的な教育を行うために、チベット政庁は教育を重視した政策をとっている。CTSA (Central Tibetan Schools Administration) は、チベット人の学生のために学校を用意して文化の継承に努めている、と報告された。

最後にジクメー氏は、現代にはチベット人に活動拠点を提供し、古代にはチベット文化を築く礎を提供したインドへの感謝を述べ、チベット政庁創立 50 周年を記念して作成された映像と音楽を紹介し、中国・インド両国との関係について今後も模索を続けていく、と述べて報告を終えた。

以上の報告により、アジアにおける仏教教団・仏教徒社会の現状認識を深めると同時に、タイ仏教徒とインド在住チベット人仏教徒が直面する様々な課題を克服していこうとする姿勢に接し、特に独自の宗教と文化の継承という点において問題意識を共有することができた。

【議論の概要】

プラボンサック師の報告に対して、中村尚司氏より、歴史学的研究の課題として、ラオスやスリランカとの関係から見ると、タイでは、スコータイ王朝時代以前から仏教活動が存在したと考えられるため、タイ仏教の歴史をより俯瞰的にみる研究が今後求められる、との指摘がなされた。また、タイ仏教徒自身が内包する現代的課題として、現在、対話を欠く政治グループの存在や、民衆の生活向上等、様々な問題をはらむ社会に対し、仏教寺院や仏教徒が貢献を行うべきか、行くとすればどのような貢献なのか、という点が質問された。さらに、ジクメー氏の報告に対して、インドと中国の狭間でチベット仏教徒が苦難の道を歩んできたことに同じ仏教徒として共感する一方、私たち日本の仏教も変わるべき時期に来ているだろう、と指摘した。

プラポンサック師は、特に中村氏の指摘したタイ仏教の抱える現代的課題に関して、伝統的にタイの仏教教団は政治と関係を持ってこなかったもので、関係を持った場合に発生する問題点を知るために、奈良時代や平安時代の日本仏教を研究し、参考にしたい、と答えた。ジクメー氏の報告に対して、芳村博実氏は、チベット語で「ありがとう」に相当する「トゥジチェ」は深いご恩を感じるという意味の表現であり、そのような仏教精神にあふれる言葉でインドへの感謝が聴けて有意義であったという感想を述べた。

ジクメー氏は、日本人は本を読んで勉強するが、体験を通して学ぶことが少ない傾向があるため、もっと現地の実際を知って欲しいと答えた。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター



第2回 ユニット1（南アジア地域班）研究会

報告題目	Faxian's（法顯）Perception of India
開催日時	2010年9月7日（火）15:00～17:30
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
報告者	胡海燕・ヒニューバー（フライブルグ大学孔子学徳方院長）
参加人数	28人

【コメンテーター】桂 紹隆（龍谷大学文学部教授）

【報告のポイント】

399年から413年にかけて、完全な戒律を求めてインドへ求法の旅に出た法顯(342～423)が記した旅行記である『佛國記』(414年)は、5世紀初頭の西域・インドの仏教・文化に関する貴重な資料である。これまで、フランス語(1836年)や英語(1848年)などに訳され、西洋の東洋学者の研究の基礎となってきた。胡海燕・ヒニューバー氏は、これに近年の研究を加え、『佛國記』に記される難語や表現を新たな視点で検討した。

【報告の概要】

胡海燕・ヒニューバー氏は、『佛國記』のこれまでの研究を振り返り、翻訳や資料の取り扱い方の問題点として、以下の3点を提示した。

第一に、中国では、『佛國記』は、記された直後から、西域からインド、スリランカ、ジャワなどの地理や文化を知る貴重な資料となっていたが、当時の中国人がどれだけ正しく『佛國記』を読めていたか不明であること。

第二に、19世紀のヨーロッパにおいて、第一級の研究者達が『佛國記』の翻訳作業を行ったが、彼らのインドに関する知識は必ずしも十分では無かったこと。

第三に、近年は『佛國記』に関する研究が文献学以外の方面にもあるが、それらが文献学に還元されていないこと。

また、近年の過去30年の研究蓄積は、①『佛國記』の新しいエディションと翻訳、②『佛國記』に基づく地理歴史学、③法顯が中国へ持ち帰った經典の伝播の研究、④『佛國記』に基づくインドや中央アジアの仏教の歴史に関する研究、⑤南アジアの美術史と『佛國記』の研究、⑥法顯が旅路中に心身の危険に晒されている状況に関する心理的な研究、⑦これまでの研究の検討、と分類できると紹介し、これらの多岐にわたる研究と、『佛國記』自身に含まれる難語の検討を行った。

難語に関しては、特に「傍梯」、「中国」、「辺地」、「鉄券」、「信風」といった用語に関して、現代のインド文化学、言語学、考古学、美術史学の新知見を取り入れた新解釈を提示した。例えば、「傍梯」は、従来「岸壁に穴を掘って石段のようにした道」だと考えられてきたが、バールフトの浮彫り彫刻にある岩山を登るレリーフや、困難な道を表すサンスクリット語の表現であるシャンクー・パダなどの例を分析し、「岩に杭のようなものを打ち付



けて登って行く道，あるいは，岩に打ち込んだ杭の上に板を渡して通る道」であると説明する。このように胡海燕・ヒニューバー氏は，多くの研究蓄積のある『佛國記』の表現内容を，多角的な手法で再検討する手法を用いている。

以上，本報告は，現在の多様化した仏教研究のあり方が，個別的な専門研究に細分化・矮小化してしまう危険性を示唆し，多

角的な視野を用いることによって再検討されるべき課題が多くあることを指摘するものであった。

【議論の概要】

桂紹隆氏は，文献や美術資料，考古学資料など各々の専門分野のみからの調査・研究になってしまいがちなところに改めて多角的な見方を持つことが如何に重要であるか確認できたとし，研究が行き詰まっている分野であっても他の研究成果を鑑みることによって新たな発見が見込まれると述べた。

北村高氏は，「傍梯」は，インドやサンスクリット語にその内容を求める方向性もあると思うが，むしろ，中国の「蜀の栈道」のイメージに近いのではないかと指摘し，法顯の表現という点からすると，今後，中国の情景や漢語の方向からも検討する必要があるのではないかと提言した。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第3回 ユニット1（南アジア地域班）研究会

報告題目	Meditations on the retrieval of lost texts
開催日時	2010年9月24日（金） 17:00～19:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
報告者	ホルスト・ラシッチ（オーストリア科学アカデミー専任研究員，ウィーン大学講師）
参加人数	20人

【コメンテーター】桂 紹隆（龍谷大学文学部教授）

【報告のポイント】

ホルスト・ラシッチ氏は、ディグナーガの『プラマーナ・サムッチャヤ自注』第2章を、チベット語訳とジネーンドラブッディの注釈書などに引用される断片に基づき、サンスクリット語に復元する作業を行っている。本研究会では、失われたテキストを再構成するための方法論的問題を具体的な事例にもとづいて報告した。また、再構成する際に、様々な過去の仏教世界で起こった事象を考慮しなければならないことを指摘し、多様化したテキストの伝播過程について説明した。

【報告の概要】

ホルスト・ラシッチ氏は、「失われたサンスクリット語テキストの再構成とはどういう作業であるべきか」という点を主要な問題意識としている。本報告では、まず、エルンスト・シュタインケルナー氏の、現存する十分なサンスクリット語資料からのサンスクリット語テキストの「再構成」と、チベット語訳からサンスクリット語への「再翻訳」との違いや、後者が本来のテキストの代用物とされるに足る確実性をもつことが困難である点、「再翻訳」は「再構成」が不可能な部分に対する充填物にすぎないことなどを強調する見解を紹介した。それについて、「オリジナルな言語的資料」の評価や確定が不確実である点、また、諸文献の伝播の過程の中での様々な変化を考慮すると、「言語的資料」である文献は歴史の「ある時期」の証拠ではあっても、シュタインケルナー氏が想定するような本来的なものではない可能性もあることを指摘した。

以上を踏まえ、失われたサンスクリット語文献の「再構成」について、『プラマーナ・サムッチャヤ自注』第2章の研究を通して得られた見解を示した。『プラマーナ・サムッチャヤ』の二種のチベット語訳について、サンスクリット語テキストの同一箇所に対する翻訳であり、同一の意味内容を表現しているはずであるのに、実際には内容が異なる場合が多数あることを報告した。さらに、ジネーンドラブッディの注釈やその他のサンスクリット語資料から回収された当該個所の「本来のテキスト」が、いずれか一方の、もしくは両方のチベット語訳と異なる場合があることも指摘した。その理由として、(1) 両チベット語訳の伝承過程で起こった誤り、(2) 二つの翻訳集団によるサンスクリット語テキストの解

釈の相異，(3) サンスクリット語写本における書写上の誤り，またはチベット翻訳者側の誤読，(4) 異なるサンスクリット語写本間の異読の存在，の4点の可能性を挙げた。特に(4)については興味深い実例を紹介した。

また、『プラマーナ・サムッチャヤ自注』第2章のある部分の両チベット語訳からのサンスクリット・テキスト再構成を実例として，以下のような彼の方法論を紹介した。まず，当該部分の両チベット語訳の各々の解釈に即して，利用可能なサンスクリット語資料を用い，両チベット語訳のサンスクリット語への「再翻訳」を提示する。「再翻訳」された両サンスクリット語テキストには未だ異同があるが，さらに様々な可能性を考慮して，異同が生じた原因を推測する。(実例の場合，両チベット語訳から想定される当該部分のサンスクリット・テキストの間には，わずか一音節の有無という相異しかなかったと考えることが可能であることを示した。)最終的に，最も原テキストに近いと考えられる還元テキストを提示する。



ホルスト・ラシッチ氏が考える「再構成」とは原テキストに関する一連の仮定であり，サンスクリット写本やチベット語訳の伝承過程で混入した誤り，同一のテキストに対する翻訳者たちの異なった解釈など，さらには，ヘルムート・クラッサー氏が示し，ラシッチ氏が「クラスルーム・モデル」と呼ぶ，テキストや写本の作成の特殊な事情など，さまざまな仮定が考慮される。また，入手可能なサンスクリット写本さえ，ある時点での特定の伝承過程におけるテキスト形態の証拠と見なされるべきである。氏は，「再構成」や「批判的校訂」などが原テキストへの一つの接近方法以上のものではないことを警告した。

以上，本報告は『プラマーナ・サムッチャヤ自注』の再構成という視点から，仏教文献がその伝承過程で多岐に変化した可能性を提示することにより，仏教の多様性を解明する一手段を提起するものであった。

【議論の概要】

桂紹隆氏は、『プラマーナ・サムッチャヤ自注』第3章の再構成に取り組んでいる立場から，本発表の方法論的提案が大変有意義であると評価した。一方，京都大学のディワーカル・アーチャーリヤ博士は，インドにおけるテキスト伝承の実態に触れて，従来比較的長い期間口承伝承によってのみ伝えられたとされているヴェーダ文献でさえも，早くから筆写による伝承が存在し，それ故に誤ったテキスト伝承をもたらしたことを証明しうる事例があるという興味深い指摘を行った。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第4回 ユニット1（南アジア地域班）研究会

報告題目	① インド・バングラデシュの仏教徒コミュニティ調査報告 ② ダリト／仏教コミュニティの現状-2010年南インド調査報告
開催日時	2010年12月7日（火）16:45～19:30
開催場所	龍谷大学 大宮学舎 清風館3階 共同研究室301
報告者	① 若原雄昭（龍谷大学理工学部教授）岡本健資（龍谷大学文学部講師） ② 佐藤智水（龍谷大学文学部教授）志賀美和子（人間文化研究機構地域研究推進センター研究員）
参加人数	48人

【コメンテーター】長崎暢子（龍谷大学人間文化科学宗教総合研究センター研究フェロー）
佐藤智水（龍谷大学文学部教授）
志賀美和子（人間文化研究機構地域研究推進センター研究員）

【報告のポイント】

人口の点でインド最大の州であるウッタルプラデーシュは、2001年統計で一億六千万人を超え、一州でもって世界の殆どの国の総人口を上回ることでも有名である。しかし、現在、同州の知事が仏教を掲げる政党の党首であることはあまり知られていない。若原・岡本両氏は、同州の政党幹部や政党が支援する施設の関係者、当該地域の仏教研究者・仏教僧への取材結果を報告した。また、バングラデシュに隣接するインド・ウェストベンガル州における調査については、ベンガル仏教徒の主要仏教寺院六ヶ寺の取材を通して得られた当該地域の仏教徒・仏教寺院に関する基礎情報を報告した。次に、佐藤・志賀両氏からは、南インドに位置するカルナータカ州ビジャプール・グルバルガ、アーンドラプラデーシュ州ハイデラバードでの仏教徒の活動の詳細を報告した。その特徴は、不可触民と呼ばれる人々が、仏教に帰依することで、アイデンティティ、自尊心、団結心などを獲得しているという点にあった。仏教が教育力を向上させる場合もあり、「仏教が持つ可能性を探る」というプロジェクト全体の目標に関わる点でも重要な調査であり、継続が期待される報告内容であった。

【報告の概要】

「インド・バングラデシュの仏教徒コミュニティ調査報告」では、まず、ウッタルプラデーシュ州で勢力伸長著しい **Bahujan Samaj Party (BSP)** と関連施設の調査報告が行われた。ウッタルプラデーシュ州は、インド最大の州であり、ダリトの支持をうける **BSP** が2006年に州の政権党となった。現在、ウッタルプラデーシュ州では、政治と宗教が密接に関係するような演出が州政府によって行われ、セキュラリズムを奉ずるインドにおいて一見すると異質な状況がある。若原氏は、こうした興味深い様相を呈するウッタルプラデーシュ州における今後の研究の方向性の決定と協力体制構築についての報告を行った。

次に、ウエストベンガル州の仏教徒に関しては、その多くがダージリン地方のチベット仏教徒であり、上座部仏教徒は平野部に限られ、そのほとんどがバングラデシュのチッタゴン地方からの移住者であることが報告された。また、今年度の調査はコルカタ市及び周辺のベンガル仏教徒コミュニティ予備調査であり、コルカタ大学の研究者とベンガル仏教僧の協力を得て、ベンガル仏教寺院六ヶ寺の訪問、聞き取り調査の実施と2010年に出版されたインドのベンガル仏教徒ならびに寺院に関するデータが掲載された最新資料を入手したことが報告された。

「ダリト／仏教コミュニティの現状-2010年南インド調査報告-」では、ビジャプールにおけるダリトの生活実態、仏教改宗運動の実態、仏教改宗（回帰）の意味についての調査が、佐藤・志賀両氏によって報告された。なお、調査に際しては、Bodhidhamma氏（インド青年仏教徒連盟会長）の協力を得た取材であったことが付言された。調査結果として、仏教は、不可触民に肯定的アイデンティティと団結のシンボルを付与していること、アンベードカルも普遍的価値を保ちその運動の中核に位置することが報告された。また、不可触民は仏教を通して自尊心、自信、団結の獲得、経済的地位や学歴の向上を実現していることが明らかにされた。しかし、仏教徒としての団結が認められる一方、不可触民内での格差拡大や差別の残存、就業機会の不平等などの存在が報告された。また、他コミュニティとの関係についても不明な点があり、今後の研究課題として提示された。

以上、両報告では、初年度の調査ということもあり、現地研究機関との協力体制構築や研究の方向性の決定、それらを通して見えてきた課題が説明された。同じインドという国内においても仏教徒の活動や信仰には多様性が認められ、現代の様々なインド仏教徒の実態を垣間見る報告であった。

【議論の概要】

若原・岡本両氏の報告に関して、志賀氏が、BSPの仏教理解の内容、仏教教育の内容について質問した。若原・岡本両氏は、仏教の理解や教育に関しては、今後、調査を通して入手した資料や教材の分析をアンベードカルの著作と合わせて行くと述べた。また、BSP関連施設における仏教教育の一部には、四諦八正道などの基本理念が含まれていることを明らかにしたが、伝統的仏教思想から逸脱する内容の検討も必要であると指摘した。

また、特にウッタラプラデーシュ州の医師や裁判官などの一般的に社会的地位が高いと



される人々が、アンベードカルの思想を政治的に用いるために仏教徒になる事例は看過できない点であり、南インドにみられる自尊心や団結力の獲得を主な目的とする仏教徒運動との相違に言及し、双方の今後のあり方についても研究の余地があることを指摘した。

佐藤氏は、ダリトの僧侶の話として、BSP に対する熱狂的な支持者と期待半分落胆半分の複雑な気持ちを持つ人がいることを指摘した。しかし、政治に興味を持つ地方の青年が BSP によって育ってきていることも事実であり、今後の動きに注目する必要があると述べた。

長崎氏は、国家と宗教が深く関係している南アジアの歴史をふまえ、仏教の多様性とその現代的可能性を探るために宗教多元社会のインド国内を調査することは必要であり、今後、このような調査が有機的に連携していくことが重要だと総括した。

【文責】龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第5回 ユニット1（南アジア地域班）研究会

報告題目	Dharmakīrti and the Mīmāṃsakas in Conflict: <i>Pramāṇavārttika</i> (svavṛtti) I.311-340
開催日時	2011年1月14日（金）17:00～19:00
開催場所	龍谷大学 大宮学舎 西翼2階 大会議室
報告者	ジョン・テイバー（ニューメキシコ大学哲学科教授）
参加人数	23人

【コメンテーター】 桂紹隆（龍谷大学文学部教授）
若原雄昭（龍谷大学理工学部教授）

【報告のポイント】

テイバー氏は、ダルマキールティがその著『プラマーナヴァールツティカ』第一章において展開するミーマーンサー批判部分、及び、それに対応すると思われるミーマーンサー側の記述に関して、ダルマキールティの批判の妥当性や説得性という観点から論じた。

【報告の概要】

ミーマーンサーの学説体系は、ヴェーダ聖典の特定のパッセージの解釈のために確立された諸規則と諸手続きの一体系である。彼らミーマーンサー学徒たちは、ヴェーダの大半の語は日常的に使用されるサンスクリット語と同じであるという仮定から出発し、文法的分析、語源学、文脈の吟味、語の他の出現事例と並行的パッセージの比較対照、そして、ヴェーダの諸パッセージが結び付けられるところの諸祭式に関する知識にもとづいて、未知の不明瞭なヴェーダの語と文の意味について知ることが出来ると考えている。ヴェーダの意味を知る際に、少なくともシャバラやクマーリラにおいては、ダルマキールティが批判するような永遠の非人為性に頼ることは見られない。彼らの方法は現代のヴェーダ研究者がとる「客観的」方法と全く別とはいえない。

ダルマキールティはプラシッディ（聖典中で確実になる語義）やヴァーキヤシェーシャ（文脈から想定される言外の意味）の適用を恣意的なものとししか見ない。また、ダルマキールティは、ミーマーンサーが普通の人々の一般的語法を信用しないことを指摘するが、一般的語法とは誰にでも同意されているものであり見解や判断の場合には問題にならないことを見落としている。また、ミーマーンサーにおける比喩的意味や語源学的意味による解釈が果たす広範囲の役割を軽視している。さらに、ヴェーダ中の語の多義性に関しては、ミーマーンサーが有する多様な解決手段を正当に評価していない。また、ダルマキールティが考えているのとは異なり、ミーマーンサーでは個人的カリスマや超常的能力に基づいて特定の人物が権威化されることはない。また、ミーマーンサーを始めとするバラモン教諸学派にとっての「祭式規定」の性質についての論点に不案内のようである。

ダルマキールティのミーマーンサーに関する批判はミーマーンサーの核心部分に対するものとなっていない。ダルマキールティが問題にするヴェーダの意味の理解可能性につい

ては、今日の我々がそうしているように、ミーマーンサーにとっては理解可能だといわねばならない。このようにダルマキールティの批判はミーマーンサーに対する真に有効な批判とはなっていない。ミーマーンサーの真価は認められておらず、その最も深い論点は扱われていない。

ダルマキールティの批判は建設的な議論というよりは論争のための論争というべきである。これは古典インド哲学に一般的に見られる傾向であるが、ダルマキールティもその一例といわねばならない。

以上、本報告では、ダルマキールティによる批判を、仏教徒側からだけではなく、ミーマーンサー学説の正当な評価に立って捉えなおすことにより、ダルマキールティの批判に対する批判を可能にし、インド古典哲学に存在する多様な立場とそれら各々に対する正当な評価の重要性を再認識することが出来た。

【議論の概要】

桂氏が、ヴェーダをもっとも重視するミーマーンサー学派と人間の解脱を最重視するダルマキールティを始めとする仏教徒にとっては、そもそも彼らの学問の目的に基本的な相異があるのではないかと問うと、テイバー氏は、ミーマーンサーも理想的な解脱を認めているが、それはダルマ（義務）の遵奉によって得られるとされると答えた。



また、さらに若原氏は、ダルマキールティにとっての実質的な論点は、ミーマーンサーの解釈学によって確立されるヴェーダ聖典の内的整合性やヴェーダの伝承の正統性にあるのではなくて、通常の知覚によって認識されえない外的対象と聖典との関係にあり、これについてはダルマキールティの議論にも説得性があると思うがどうか、とたずねた。これに対し、テイバー氏は、「もし超感覚的な事柄を知覚出来ないならば」ということがヴェーダの問題とすることであり、これはミーマーンサーにとっても困難な問題であるから、これに対してどのような回答があるかを問題とした。我々は、たとえ超感覚的なものに達することはできなくてもヴェーダの意味する答えを知ることが出来る、実際我々は皆そうしている、我々はある意味で皆ミーマーンサーカであると、締めくくった。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第6回 ユニット1（南アジア地域班）研究会

報告題目	① タイ調査報告-国際エンゲージド・ブuddiズム・ネットワーク(INEB)に出席して- ② スリランカ調査報告-世界仏教徒大会に出席して
開催日時	2011年1月27日（木）16:00～19:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎清風館3階共同研究室301
報告者	① 嵩満也（龍谷大学国際文化学部教授） ② 中村尚司（龍谷大学人間科学宗教総合研究センター・研究フェロー）
参加人数	9人

【コメンテーター】佐藤智水（龍谷大学文学部教授）

長崎暢子（龍谷大学人間科学宗教総合研究センター研究フェロー）

【報告のポイント】

嵩・中村両氏より、地域、宗派などによって異なる経典を使う仏教徒の交流活動について報告がなされた。嵩氏は、国際エンゲージド・ブuddiズム・ネットワーク会議に出席し、特に東南アジア諸国の仏教徒が各々の事情をかかえながらも、今後連携を強めていこうとする活動の実態を説明した。中村氏は、世界仏教徒会議スリランカ大会に出席したこと、さらにスリランカの仏教徒や市民の社会活動の実態を報告した。

【報告の概要】

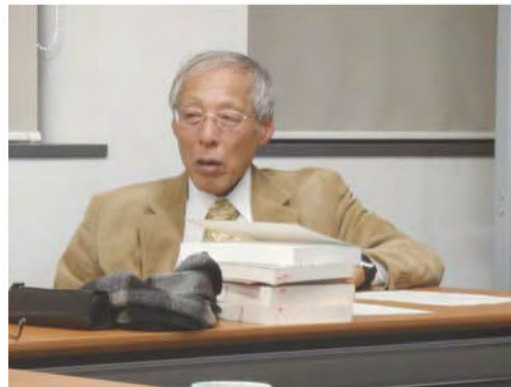
まず、タイで行われた国際エンゲージド・ブuddiズム・ネットワーク会議（INEB）へ出席した嵩氏が、会議の様子や会議の参加者への聞き取り調査の内容を公表した。会議では、タイ、ミャンマー、ラオス、マレーシア、インドネシア、インド、台湾、日本の活動報告、次年度の活動方針が話し合われたことが報告された。聞き取り調査は、ミャンマー、マレーシア、インドからの参加者に行われたが、国によって仏教徒がかかえる問題や、仏教徒と社会との関係が異なっている現状が存在することが判明した。しかし、東南アジアの仏教徒は、「仏教」という結びつきで INEB のような組織を通してネットワークを作りつつある。韓国仏教や台湾仏教が積極的に東南アジアの仏教とのネットワークを構築しているのに比べ、日本の仏教教団の存在感は薄いと報告が締めくくられた。

次に、中村氏よりスリランカで行われた第25回世界仏教徒会議スリランカ大会の内容やスリランカ市民の現状報告がなされた。今回の大会のテーマは、「仏陀の教えによる社会的和解」であり、全日本仏教会もこれに参加したこと、様々な宗派や団体をこえた世界の仏教徒との交流があったことが紹介された。会議では、執行役員に中国人やスリランカ人が選出され、次回の大会は韓国であることが決定し、世界各地の仏教徒が連携しつつあることも報告された。加えて、中村氏は、社会活動を担っている宗教団体や市民団体と交流したことを報告した。

【議論の概要】

嵩氏に対して佐藤氏は、聞き取り調査の報告に関連してプーナで仏教活動を行っているローカミトラという人物について質問した。嵩氏は、アンベードカルの思想の継承を掲げる **Jambudvipa Trust** という組織とローカミトラ氏の間係を紹介した。中村氏に対して長崎氏は、仏教徒同士のネットワークについて、各々の社会や仏教徒の歴史などをふまえ多様な方向からつながりを深めていくべきだとコメントし議論を締めくくった。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター



第7回 ユニット1（南アジア地域班）研究会

報告題目	How to teach a Buddhist monk to refute the outsiders? Text-critical remarks on some works by Bhāviveka
開催日時	2011年1月28日（金）17:00～19:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
報告者	ヘルムート・クラッサー（オーストリア科学アカデミー／アジア文化・思想史研究所所長，ウィーン大学チベット学仏教学科講師）
参加人数	28人

【コメンテーター】桂紹隆（龍谷大学文学部教授）

【報告のポイント】

六世紀ごろに活躍したインド仏教中期中観派の学匠バーヴィヴェーカ（清弁）に帰せられている三つの論典を取り上げ、それらのテキストに見られる仏教以外の思想に対するバーヴィヴェーカの反応に焦点を当てた報告であった。六派哲学などの異教徒に対して、仏教徒であるバーヴィヴェーカがどのような態度をとったのかということ、そのテキストが実際にどのようにして記されたのか、またチベット訳の問題をも射程にいれて、文献を読み解いた。

【報告の概要】

クラッサー氏は、中論に対するバーヴィヴェーカの注釈『般若灯論』、彼の自著『中観心論頌』、及びその注釈書『思釈炎』を使用し、主としてチベット語訳を用い、『中観心論頌』のみ梵本が残っている場合はそれを提示して検討を加えた。



まず『般若灯論』の特徴的な表現に注目し、六派哲学の一派であるミーマーンサー学派などを批判していることを指摘した。先行研究をもとに『般若灯論』においてその表現が用いられている箇所を網羅的に挙げ、それに対するアヴァローキタヴラタによる注釈の記述を交えて紹介した。

氏はバーヴィヴェーカと異教徒とが対論しているトピックのひとつである「如来の一切智者性」などを取り上げ、「如来は他の人と変わらない人間であるので一切智者ではない」という説が今回取り上げたテキストに共通して見られることを指摘し、その一々の記事を確認し、細かな点を比較した。

さらに「*bstan bcos byed pa*（論書作者）」「*slob dpon*（*ācārya*，師）」という語が、著者自身を指すことばとして『思釈炎』に用いられていることに注意を促した。後者に関して、著

者が自分のことを「先生」と呼ぶというこの不自然な現象が起こっているのは、書記のような者が先生であるバーヴィヴェーカのことばを筆録していたからであり、つまり、先生が「わたしは云々」と言ったことを、書記が「先生は云々」というように記したからではないか、ということを提案した。このように、テキストが実際にどのように造られていったのかを思い描くことは、テキストを読み解く際のヒントとなる可能性があるということを述べた。

以上、本報告では、2010 年度ユニット 1（南アジア地域班）第 3 回研究会におけるホルスト・ラシッチ氏の発表にも通じるテキストの多様な伝播過程の一端が考察された。

【議論の概要】

桂紹隆氏は、クラッサー氏の創造的でかつ堅実な研究姿勢を高く評価し、また、テキストが造られた現場について考えるということに賛意を表した。また、フロアから、当該の三つのテキストの著者問題に関する見解を質し、それを解決するひとつの方向性を示唆する報告として発表者の見解を評価する声が上がった。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第8回 ユニット1（南アジア地域班）研究会

報告題目	① Differentiating Dignāga: A Question of Identity in the <i>Prasannapadā</i> ② Three Yogācāra Texts on the Ideal Debater: <i>Yogācārabhūmi</i> , <i>Abhidharmasamuccaya</i> and <i>Abhidharma-samuccayabhāṣya</i>
開催日時	2011年2月18日（金）16:00～19:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎清風館3階共同研究室301
報告者	① アン・マクドナルド（オーストリア科学アカデミー／アジア文化・思想 史研究所研究員） ② アルベルト・トデスキーニ（ヴァージニア大学宗教学科博士課程修了）
参加人数	16人

【コメンテーター】桂紹隆（龍谷大学文学部教授）

【報告のポイント】

アン・マクドナルド氏は、チャンドラキールティ（月称）による『中論』注釈書の『プラサンナパダー（明らかなことば）』を取り上げ、そこに見られるインド論理学に関する記述を考察対象とした。その論理学説は従来、仏教論理学の大成者であるディグナーガ（陳那）のものであると思われてきたが、有力な証拠を基にした緻密な論証によってそれがディグナーガの説ではないことを証明し、同時にそれがニヤーヤ学派の説であることを明らかにした。

アルベルト・トデスキーニ氏は、『瑜伽師地論（ヨーガーチャラブーミ）』などの記述をもとに、インド人、特に仏教徒が使用していた議論の進め方、方法について述べた。

【報告の概要】

龍樹の流れを汲むインド中観派を研究対象としているマクドナルド氏は、7世紀前半に活躍したチャンドラキールティの研究者である。今回、マクドナルド氏が考察対象としたのは『プラサンナパダー』第一章に見られる「存在物は生じたものではない」という月称の主張に対する「ある者」からの批判である。従来、その「ある者」がチャンドラキールティを批判する際に「知識の対象の理解は知識手段に依拠している」という文言を用いていることから、同様の主張を表明しているディグナーガが「ある者」と考えられてきた。これまで、マーク・シデリッツ氏のみが当該箇所の一部がニヤーヤ学派のものであるという主張をしていた。シデリッツ氏が指摘したニヤーヤ学派の文献をマクドナルド氏が調査した際に、ウドヨータカラの『ニヤーヤヴァールティカ』に当該箇所と同様の議論が存在することを見いだした。

マクドナルド氏が指摘するように『プラサンナパダー』と『ニヤーヤヴァールティカ』の議論はかなりの部分で一致し、前者の著者であるチャンドラキールティがニヤーヤ学派の説を意識してそれを引用していたということは明白である。また、ヴァーツァヤナの

『ニヤーヤバーシャ』にも同様の議論が見られることも併せて指摘し、「ある者」が仏教内部のディグナーガではなく、ニヤーヤ学派であることを論証した。

トデスキーニ氏は、『瑜伽師地論』『阿毘達磨集論』『阿毘達磨雜集論』を使用し、インドの仏教徒のスピーチ、論証、及び討論の実践に関連する問題を考察した。また、パーリ語資料である『論事』やニカーヤの資料も合わせて用いた。理想的な討論者の特性として、自分自身及び相手の学説に対する知識、言具円満、無畏、平静、丁寧、辨才があげられる。こうした特性をそなえた人は、論争の勝敗に関して有利な立場にある一方、仏教徒が討論者として持つべきだと考えていた性質の多くを反映するようなやり方で振る舞うのである。トデスキーニ氏は、議論の背景を明らかにするために八正道の正語や、対話・論争・討論・教理的議論に対する仏教徒の一般的な態度にも言及した。

以上のふたつの報告では、古代インド仏教徒が異教徒や他学派と関わり議論する様子が改めて明らかにされたが、現代アジアにおいて仏教徒が論理的に他宗教や異宗派との対話をするための参考にもなる機会であった。

【議論の概要】

桂氏は、マクドナルド氏の主張に大筋で賛同していたが、当該箇所の中に見られる「ニシュチャヤ（決定、niścaya）」ということばがディグナーガにとって重要なタームであるということを指摘し、依然として「ある者」がディグナーガである可能性があるということを示した。他にもフロアからは発表者の研究の進展を期待する声が聞かれ、特に、『プラサンナパダー』第一章のテキスト校訂と翻訳を出版することに期待が寄せられていた。また、トデスキーニ氏に対して、桂氏は、研究の進んでいない分野であるが、重要な研究であり興味深いため、これからの研究に期待すると締めくくった。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター



第9回 ユニット1（南アジア地域班）研究会

報告題目	The Good Monk and His Wife are Seldom Parted -Reflections on Married Monks in Indian Buddhism-
開催日時	2011年2月23日（水）10:00～12:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎清風館3階共同研究室301
報告者	シェーン・クラーク（マクマスター大学社会科学部宗教学科准教授）
参加人数	18人

【コメンテーター】井上綾瀬（龍谷大学アジア仏教文化研究センター・ユニット1 RA）

【報告のポイント】

本報告では、結婚や離婚についてのインドの慣習、律文献に見られる出家前は夫婦であった比丘と比丘尼の出家後の生活、彼等の仏教教団内での子育ての方法が報告された。また、中央アジア出土の文献に見られる比丘の生活や僧団運営と律文献との対応も紹介された。

【報告の概要】



クラーク氏は、まず、古代インドの仏教教団に見られる社会史に注目していることを述べ、インドの僧団に家族が存在し得たか、例えば、夫婦が一緒に出家することがあったのか、そうならば子供をどうするのか、子供を産んだ比丘尼は教団内に残れたのか、教団内での子供の保育はどのようなものだったのか、という疑問を提示した。そして、その答えを律文献の中から探した。

まず、古代インドで離婚がどのように行われていたか、妻の立場がどのようなものであったかを『マヌ法典』や『アルタシャーストラ』の例をとりあげ説明した。さらに、仏教文献における「妻」に関する分類を『根本説一切有部毘奈耶』を例に紹介した。

さらに、律文献では、比丘が出家する際には離婚は必要ではなく、両親の同意さえあれば出家出来たこと、比丘尼が出家する際には両親の同意に加え夫の許可が必要であったことが確認された。そのため、出家生活に入る為に離婚は必要でなかったことが紹介された。さらに、出家前に夫婦であった比丘と比丘尼と一緒に昼食をとるという因縁譚をもつ比丘尼波逸提法第六条供給無病比丘水扇戒から、出家後も仲睦まじい様子をみせる比丘・比丘尼を紹介し、これらの様子はインドでは普通の比丘達の生活の様子であったとした。また、捨墮法第四条使非親尼浣故衣戒に記されるウダーイン比丘とグプター比丘尼の夫婦の因縁譚から、教団内で性交渉を介さずに妊娠した子供は、律の規定上、生み育てることが可能であったことが確認された。

また、3世紀の中央アジアの情報であるが、僧院で妻帯する比丘や、家庭を築きながら比丘として活動し得た事例を紹介し、もし、このような生活を営んでいたなら、そのような比丘は、家庭を営みつつパートタイムで修行する信心深い仏教の専門家にほかならないと指摘した。

以上、本報告では、古代インド社会での結婚や離婚に関する規則、律文献に見られる出家前には夫婦であった比丘と比丘尼が出家後にどのような生活を送っていたかの紹介があった。また、クラーク氏は、仏教哲学や教説の研究と共に、比丘の実生活についても研究することが仏教を多角的にみるために必要だと締めくくった。

【議論の概要】

井上氏は、比丘尼波逸提法第六条供給無病比丘水扇戒や捨墮法第四条使非親尼浣故衣戒は、比丘の生活として通常の状態か、例外なのか、さらに、離婚をせずに出家してもそれは結婚したままと言えるのか、と質問した。これに対し、クラーク氏は、律文献は教団内で使われたため記述以上のことは言えないとしながらも、古代インド社会における離婚は妻を「売ること」「不動産として運用すること」のいずれかを意味するとし、それに当てはまらない比丘と比丘尼の場合は「結婚したまま」だと答えた。

また、フロアから、佐々木閑氏（花園大学文学部教授）が、本報告の比丘・比丘尼の生活実態には同意できるが、「中央アジアの比丘」の様子を因縁譚と律文献の内容に対応させ、「インド内部の比丘」の生活が乱れていたと考えることが妥当かと質問した。クラーク氏は、捨墮法第四条使非親尼浣故衣戒では、性交渉を介さずに子供が出来たので波羅夷第一条姪戒には該当せず、律文献内での整合性に乱れが無いことに同意し、「中央アジアの比丘」の様子と律文献の関わりについては結びつきを示す資料が少ないと述べた。しかし、インド内部において比丘達の生活が乱れていなかった証拠もないと指摘した。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター